

## 博士論文要約

### 食物アレルギーのある思春期・青年期の子どもの社会的食事場面における ヘルスリテラシーの促進に向けた学習会プログラム開発と有用性の検討

Development of a study-session program to promote health literacy in social eating situations  
of adolescents and young adults with food allergies and  
examination of the program's usefulness

千葉大学大学院看護学研究科

橋本 美穂

#### I. 緒言

食物アレルギー (Food allergy ; FA) は、特異的IgE抗体が関与する即時型反応であり、摂取後数分以内に症状が出現し、時にアナフィラキシーショックまで進展することが特徴である。近年の治療の変化に伴い、特にFAのある思春期・青年期は、完全除去の治療とアレルゲンを含む食事を少しずつ摂取する治療の両方を経験している世代であり (日本小児アレルギー学会食物アレルギー委員会, 2016)、行動範囲や人間関係が広がるなかで求められる食行動の変化にも対応することが求められている。

FAのある思春期・青年期の子どもの食行動は、食べ物の成分表からアレルゲンを読み取り、安全な食品の選択やアナフィラキシーを回避するための自己管理が行えていると報告されている (Monks et al, 2010 ; 岡田他, 2019)。一方、原因食物であると認識していても周囲の人に自分がFAであることを伝えられず、あえて食べて症状が誘発される経験をしていることも報告されている (Warren et al, 2016 ; 山出他, 2019)。思春期・青年期における食行動は、生命の維持や成長に必要な栄養素を摂ることに加え、多様な場で人との関係を築いていくうえで必要となるため、本研究では社会的食事場面ととらえ、家族との食事、学校での食事、友達との外食に着目した。適切な食行動をとるためには、FAの知識や情報を活用、食べ物を選択、判断するというヘルスリテラシー (Health Literacy ; HL) を用いることで、多様な食事情報がある環境で、自分の健康を維持し、適切に行動をするために必要な能力を幅広く捉えられると考えた。

Manganello (2008) は、青年期のHLは3つの構成要素の他に情報入手の能力にかかわるメディアリテラシーを含み、これらのHLは人間関係に影響を受けると述べている。

以上より、Manganello (2008) の青年期のHLを参考に、FAのある思春期・青年期の子どもの社会的食事場面におけるHLの実際と、社会的食事場面におけるHLの枠組みを解明することによって、社会的食事場面におけるHLを促進するための効果的な看護援助を考案できると考え、本研究に着手した。

## II. 研究目的

本研究の目的は、FAのある思春期・青年期の子どもの社会的食事場面におけるHLの促進に向けた学習会プログラムを開発し、その有用性を検討することである。

この目的を達成するために、本研究は、以下の2段階で構成した。

### 1. 研究1 食物アレルギーのある思春期・青年期の子どもの社会的食事場面におけるヘルスリテラシー

<研究目的>

- (1) 食物アレルギーのある思春期・青年期の子どもの社会的食事場面におけるヘルスリテラシーの枠組みを作成する。
- (2) 社会的食事場面におけるヘルスリテラシーを促進するための支援を検討する。

### 2. 研究2 食物アレルギーのある中学生の社会的食事場面におけるヘルスリテラシーの促進に向けた学習会プログラム開発と有用性の検討

<研究目的>

- (1) 研究1の結果から導出された社会的食事場面におけるヘルスリテラシーを促進するための学習会プログラムを開発する。
- (2) 食物アレルギーのある中学生を対象に学習会プログラムの有用性を検討する。

## III. 本研究の枠組み

本研究は、人の発達は個人と環境の相互作用であると捉える Bronfenbrennerの生態学的システム理論（1979/1994を）基盤としたManganello（2008）のHLの枠組みを参考にし、FAのある思春期・青年期の子どもに関する先行研究より、環境を社会的食事場面として着目し、社会的食事場面におけるHLが周囲の人の反応や関係性によって影響する枠組みを作成した。

## IV. 用語の定義

### 1. 社会的食事場面

本研究における社会的な食事場面とは、家族との食事場面、学校での食事場面、友達との外食場面を指す。

### 2. ヘルスリテラシー

FAある思春期・青年期の子どもが家族、学校、友達との食事場面において、良好な人間関係を通して多様な食事に関する情報の中から、FAに伴う知識を獲得、活用し、適切な食行動をとることを指す。本研究では、Mnaganello（2008）が提唱した Nutbeam（2000）の3つのHL「機能的ヘルスリテラシー」、「相互作用的ヘルスリテラシー」、「批判的ヘルスリテラシー」と、「メディアリテラシー」を参考にした。

### 3. 学習会プログラム

本研究において、系統的に学習する単元である、「友達との外食に必要なことを思い出そう」、「グルメ情報について考えよう」、「医療者と話すことについて考えよう」の順序に従って展開された学習活動や学習内容を指す。

### 4. 学習教材

本学習会プログラムの学習活動を展開する上で学習対象者が活用する素材である「ワークシート」、「模擬診療場面におけるシミュレーションシナリオ」を指す。

## V. 倫理的配慮

本研究は、研究1、2において、順天堂大学医療看護学部研究等倫理委員会の承認を得て行った。

## VI. 研究1：食物アレルギーのある思春期・青年期の子どもの社会的食事場面におけるヘルスリテラシー

先行研究からFAのある思春期・青年期の子どもの社会的食事場面におけるHLの枠組みを作成し、必要な支援を明らかにすることを目的に、FAのある中学生6名、高校生2名を対象に面接調査を実施し、質的帰納的分析を行い、支援の方向性を導出した。

分析結果より、FAのある思春期・青年期の子どもは家族との食事場면을基盤としていた。支援が必要な社会的食事場面におけるHLの課題として、「いつもの人・場所での食事は安全と判断し、緊急時薬を持参しない（批判的HLの課題）」、「自分のことを知らない友達と食べる場面では、場の雰囲気から自分のFAについて伝えることができない（相互作用的HLの課題）」、「FAの情報は信頼のおける親からの情報を助けてしている（メディアリテラシーの課題）」、「診療場面における医師との関係性が不十分である（相互作用的HLの課題）」が明らかになった。

HLの課題に対する社会的食事場面におけるHLの促進に向けた支援として、「良好な人間関係を保ちながらFAの情報資源を活用し評価する力」、「少しずつ食べる治療を遂行しながら社会的食事場面で自他共に対処する力」、「医療者とのコミュニケーションを図る力」を促進する支援が導出された。

## VII. 研究2：食物アレルギーのある中学生の社会的食事場面におけるヘルスリテラシーの促進に向けた学習会プログラム開発と有用性の検討

研究1の結果からADDIEモデル（ガニエ他，2007）の手順参考に、FAのある中学生の社会的食事場面におけるHLの促進に向けた3つの単元から成る学習会プログラム「自分の食物アレルギーについて発信する方法を考えよう」、ワークシート、学習指導案を考案した。小児の食物アレルギーの専門家、看護教育学教員、FAのある中学生を養育する母親による評価と修正意見を得て学習会プログラムを洗練した。

FAのある中学生2名を対象に、小児アレルギーエデュケーター看護師のファシリテーションによる学習会プログラムのパイロットスタディを実施した。対象者による評価と反応から、学習会プログラムとしての有用性が示唆された。

## VIII. 考察

開発した学習会プログラムの特徴は、食事場面における文脈の中で人間関係に着目したHLを促進する支援であった。FAのある思春期の子どもが本学習会プログラムによる学習活動を展開することは、社会的食事場面におけるHLを促進する可能性を示唆し、さらに、親との信頼関係を基盤とした食行動の自立に向けた教育的アプローチの一つとして考える。

今後の課題として、学習会プログラムの対象者を増やし、活用方法を検討すること、社会的食事場面におけるHLの評価時期の検討が必要である。

## IX. 結論

FAのある思春期・青年期の子どもの社会的食事場面における支援が必要なHLの課題に対し、学習会プログラム、学習教材を考案し、専門家による実用性の評価を受け洗練した。FAのある中学生2名を対象にパイロットスタディを実施した結果、対象者の反応や達成度の評価から、有用性が示唆された。

## 引用文献

- Bronfenbrenner.U (1979) / 磯貝芳郎・福富護訳 (1994). 人間発達の生態学. 川島書店.
- Manganello. J.A. (2008). Health literacy and adolescents: a framework and agenda for future research. *Health education research*. 23(5). 840–847.
- Monks. H., Gowland. M.H., Mackenzie.H., Erlewyn-Lajeunesse.M., King.R., Lucas.J.S., & Roberts. G. (2010). How do teenagers manage their food allergies. *Clinical et Experimental Allergy*, 40, 1533-1540.
- 日本小児アレルギー学会食物アレルギー委員会 (2016). 食物アレルギー診療ガイドライン 2016. 協和企画.
- Nutbeam. D. (2000). Health literacy as a public health goal: a challenge for contemporary health education and communication strategies into the 21st century. *Health promotion international*, 15(3), 259-267.
- 岡田恵利, 中里友美, 井関夏実, 榎村 春江, 古田朋子, 杉浦至郎, 伊藤浩明 (2019). 思春期に至った食物アレルギー患者の食生活・社会生活に関する意識調査, *小児保健研究*, 78 (2), 142-149.

R.M.ガニエ, W.W.ウェイジャー, K.C.ゴラス, J.M.ケラー著/ 鈴木克明, 岩崎信監訳  
(2007). インストラクショナルデザインの原理. 北大路書房.

山出晶子, 山本健, 井上祐三郎, 下条 直樹, 星岡 明 (2019). 思春期から成人移行期  
にかけて食物アレルギー患者が経験する社会的な問題, アレルギー, 68(4), 537.

Warren. C. M., Dyer.A.A., Otto.A.K., Smith. B. M., Kauke. K., Dibakar.C. & Gupta. R.S.  
(2016). Food Allergy-Related Risk-Taking and Management Behaviors Among  
Adolescents and young adults. American Academy of Allergy, Asthma & Immunology, 5  
(2) ,381-390.